

令和6年度 学校評価（後期の結果）

伊予市立港南中学校

校長 久保 雄

令和6年度後期の教育活動への評価を、生徒・保護者・教職員で実施しました。その結果を踏まえ、今後の教育活動の改善と充実のための取組を立案し、今後の教育活動をより一層、改善・充実させてまいります。

- ※ 実施期間 令和6年12月9日(月)～13日(金)
- ※ 実施方法 本校の重点目標に対する、WEB上での4段階択一式回答及び記述  
(4段階 4：そうだと思う 3：だいたいそうだと思う 2：あまりそうだと思う 1：まったく思わない)
- ※ 判定基準 A：平均3.2以上 B：平均2.6以上 C：平均2.6未満
- ※ 評価判定 上段は7月調査結果、下段は12月調査結果

重点 目標	具体的な取組内容		総合 判定	評 価			考察と今後の取組
				判定	対象	平均	
協働的な学習活動の推進	①	ICT機器を積極的に活用した「学ぶ喜び・学んだ実感」のある授業の工夫	2.9 B ↓ 2.9 B	3.0 B ↓ 2.9 B	生徒	2.9 2.9	【考察】 ○ ①～④ともに、おおむね良好な評価結果ですが、一部の項目では前期からの低下がみられます。 ○ ①について、生徒・教員ともに授業等でのICT機器の活用が不十分と考えている傾向があることが分かります。 ○ ②について、「言語技術教育」を積極的に取り入れたことにより、根拠を持って論理的に表現する力が身に付きつつあるものと考えます。 ○ ③について、生徒も教員も低下しています。個に応じた学習ができるよう、支援体制を整えていますが、教員は更なる支援の必要性を感じているからと言えます。 ○ ④は、生徒、保護者、教員とも、他より低めの評価結果となっています。学習成果に対して家庭での学習の不足を、どの評価者も感じていることが分かります。  【今後の取組】 ○ ①については、ICTを活用して資料を提示したり話合いの場面を設定したりするなど、なお一層の授業改善に努めます。 ○ ②については、「問答ゲーム」などの継続により、コミュニケーション能力の育成に努めます。 ○ ③については、CBT（一人一台のタブレット端末上で行うテスト）を行い、生徒が自分の理解度を即座に分かるようにすることで、学びの成果を実感できるよう努めます。 ○ ④については、家庭と学校が協力しながら、生徒の家庭学習の習慣化に努め、学力の定着・向上につなげます。
				保護者	3.0 3.0		
				教員	3.0 2.9		
	②	基礎・基本を活用して考え、表現する場(伝え合い・分かり合う場)を設定し、生徒の力を引き出す工夫		2.9 B ↓ 3.0 B	生徒	3.0 3.0	
				保護者	2.9 2.9		
				教員	2.9 2.9		
	③	振り返りを行い、特別支援教育の視点による一人一人に配慮した授業展開の工夫		3.1 B ↓ 3.0 B	生徒	3.4 3.3	
				保護者	3.0 3.0		
				教員	2.9 2.8		
	④	家庭学習に生徒自らが主体的に取り組める手立ての工夫		2.7 B ↓ 2.6 B	生徒	2.7 2.7	
				保護者	2.6 2.5		
				教員	2.7 2.7		
主体的な生徒活動の推進	①	仲間と共にやり抜く場を設定し、やりがいや達成感を味わわせる工夫	3.1 B ↓ 3.1 B	3.1 B ↓ 3.2 A	生徒	3.2 3.3	【考察】 ○ ①～④ともに、おおむね良好な評価結果であり、前期より評価が上がっている項目もあります。 ○ ①・③について、生徒が企画・運営するブロック制での運動会など、生徒が主体的に活動できる場を設定したことで、充実した活動ができていると実感していることが分かります。 ○ ②について、定期的な教育相談だけではなく、適切なタイミングでの教育相談や進路指導、相談しやすい環境づくりが成果を上げているからと考えます。  【今後の取組】 ○ ①・③・④については、今後も様々な活動において生徒が主体となり、企画・運営できるよう支援するとともに、個性を発揮しながら伸び伸びと活動できるための支持的な学級・学年の風土づくりに努めます。 ○ ②については、生徒をあらゆる面から支援できるように、学級担任や学年部、生徒指導、SCやSSW、その他の支援員と連携を図りながら生徒理解に努めます。また、生徒が、深い自己理解に基づき、「何をしたいのか」「何をすべきか」、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択、設定してこの目標の達成のため、自発的、自律的、かつ他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力（自己指導能力）を獲得することができるよう、引き続き支援に努めます。 ○ ③・④については、生徒の相互理解の下、お互いが称賛し合える人間関係づくりに配慮します。
				保護者	3.3 3.3		
				教員	2.9 3.1		
	②	生徒理解・教育相談を効果的に行い、自己管理能力を高める指導の充実		3.2 B ↓ 3.2 B	生徒	3.3 3.3	
				保護者	3.2 3.2		
				教員	3.0 3.0		
	③	生徒同士が協力・協働することを通しての互いに高め合える集団づくり		3.2 B ↓ 3.3 A	生徒	3.4 3.5	
				保護者	3.2 3.1		
				教員	2.9 3.2		
	④	切磋琢磨する部活動等の充実による個性の伸長と自信を持たせる工夫		3.0 B ↓ 2.9 B	生徒	2.9 2.9	
				保護者			
				教員	3.0 2.9		



重点 目標	具体的な取組内容		総合 判定	評 価			考察と今後の取組
				判定	対象	平均	
充実した道徳教育の推進	①	互いを認め合い、励まし合う仲間意識を高め、安心できる支持的風土のある集団づくり	3.1 B ↓ 3.1 B	3.3 A ↓ 3.2 A	生徒	3.5 3.4	【考察】 ○ ①～④ともに、おおむね良好な評価結果ですが、一部の項目で、生徒・保護者の評価が下がっています。 ○ ①～④について、教員は道徳科の時間を要として、学級経営や教科経営、その他の教育活動を通じて道徳教育を推進しています。また、道徳教育推進教師を中心に教材の開発を進めたり、学級担任以外が授業を行ったりする「リレー道徳」をして研鑽し、授業実践をしています。議論する学習が定着しており、級友と意見を出し合うことで相互理解にもつながり、生徒は、安心できる支持的風土のある学級集団であると感じていることが分かります。  【今後の取組】 ○ 生徒が有用感を感じたり自己肯定感を感じたりすることができ ることに、安心して学校生活を送れることは必要であると考え ます。そのためにも、生徒たちが夢や目標を語り合い、意見 を尊重しあえるような仲間意識に基づいた支持的風土づくりに 努めるとともに、他の教科指導や特別活動、生徒指導等とも連 携を図りながら道徳教育の充実に努めます。
					保護者	3.1 3.2	
						教員	
	②	有用感を感じ、人としての生き方について考え、議論する道徳の時間の指導の工夫		3.1 B ↓ 3.1 B	生徒	3.4 3.3	
					保護者	3.0 3.2	
						教員	
	③	互いに夢や目標を語り合う場や機会の充実による自己肯定感の醸成		3.1 B ↓ 3.1 B	生徒	3.2 3.3	
					保護者	3.3 3.3	
						教員	
	④	自己評価・他者評価による自己認識・他者認識の力の向上		3.1 B ↓ 3.1 B	生徒	3.1 3.1	
					保護者	3.0 3.1	
						教員	
信頼・期待される学校づくりの推進	①	地域の「ひと・こと・もの」とかかわる学習による生きる力につながる教育活動の工夫	3.1 B ↓ 3.0 B	2.9 B ↓ 3.0 B	生徒	3.1 3.1	【考察】 ○ ①～④ともに、おおむね良好な評価結果です。 ○ ②は、学校ホームページや学校だより、学級通信を通じた日々の情報が、生き生きとした写真や記事とともに発信された成果が、高い評価となって表れています。また、情報共有・連絡アプリ「マチコミ」を通じた情報伝達が定着してきた成果と考えます。 ○ ③は、P T A活動や後援会活動を通じて、日頃から学校活動にご協力いただいている協力関係の表れであると考えます。  【今後の取組】 ○ 令和7年度より学校運営協議会（コミュニティ・スクール）が本格的に始動します。これまで培ってきた学校と保護者、地域との連携・協力関係を更に深め、「地域の子供は地域で育てる」ことを目指し、「地域で育てたい子ども像」を共有できるよう、信頼・期待される学校づくりに努めます。  ＜＜学校関係者評価委員より＞＞ ◎「問答ゲーム」を通して、自己表現力、支持的風土を育てる取組は、とても魅力的です。「問答ゲーム」は支持的風土がないと成り立たないと思います。 ◎ 少数意見、はみ出しがちな生徒の声、日頃からの生徒のつぶやきに耳を傾けてくださる教職員の方の存在はありがたいです。 ● 学校と地域がともに進んでいくためには、やはり信頼関係が大切だと思います。なんでも言い合える、そして、お互いを尊重し合える関係が築けるといいです。 ● 学校も地域もwin-winになれる関係の構築が大切だと思います。保護者も参加できる活動を増やせば、子どもとのコミュニケーションも増えると思います。 ● 主体的な学習への取組に工夫が必要であると思います。
					保護者	2.8 2.9	
						教員	
	②	HP、学校便り等を通じた情報発信		3.3 A ↓ 3.3 A	生徒	<div></div> <div></div>	
					保護者	3.4 3.4	
						教員	
	③	開かれた学校を意識し、保護者の願いや思いへの適切な対応		3.2 B ↓ 3.2 B	生徒	<div></div> <div></div>	
					保護者	3.4 3.4	
						教員	
	④	小中連携の工夫と学校運営の見直しの実施		2.9 B ↓ 2.8 B	生徒	<div></div> <div></div>	
					保護者	2.8 2.9	
						教員	

【別表】外部人材の活用による業務改善について

子どもと向き合う時間、教材研究の時間			業務の負担			配置効果		
増加した	少し増加した	変わらない	軽減された	少し軽減された	変わらない	効果がある	少し効果がある	効果がない
46%	33%	21%	59%	28%	13%	77%	23%	0%

回答対象:教職員

- ・子どもと向き合う時間、教材研究の時間では、「増加した・少し増加した」が令和5年度70%であったが、令和6年度は79%に増加した。
  - ・業務の負担では、「軽減した・少し軽減した」が令和5年度は78%であったが、令和6年度は87%に増加した。
  - ・配置効果では、「効果がある・少し効果がある」が令和5年度は91%であったが、令和6年度は100%に増加した。
- 3つの観点すべてにおいて、前年度よりも外部人材活用による業務改善につながる結果となっている。